

『東京朝日新聞』紙上「是清翁一代記」中ノ一節

○『東京朝日新聞』紙上「是清翁一代記」中ノ一節

牧野富太郎

【牧野富太郎云フ】此頃『東京朝日新聞』紙上ニ連載セラレツ、アル高橋是清氏ノ一代記ナル「是清翁一代記」ノ第二十五回（昭和四年二月十七日夕刊）ノ記事ニ我東京ノ大學植物學教授デアッタ矢田部良吉博士ニ關スル事項ガアル、是等ハ日本植物史ノ好資料デアルト考フルノデ茲ニ東京朝日新聞社ノ許諾ヲ得テ其一節ヲ本誌ニ轉載シ以テ參考ニ供スル事ニシタ、原文ニハフリ假名ガアルガ今此ニハ其レヲ省略シタ

その頃の森有禮

明治二年の始めごろから、森先生は廢刀論を主張され、その急先鋒であつた。また政府では各藩の公用人を集めて會議所を作り、森先生は議長の職を攝行し、神田孝平氏が副議長であつた。我々は森先生と神田先生とが時勢を論ぜらるゝところをたびゝ聞いた。森先生の廢刀論は

一、官吏兵隊の外帶刀を廢するは隨意たるべきこと。

二、官吏といへどもわき差を廢するは隨意たるべきこと。

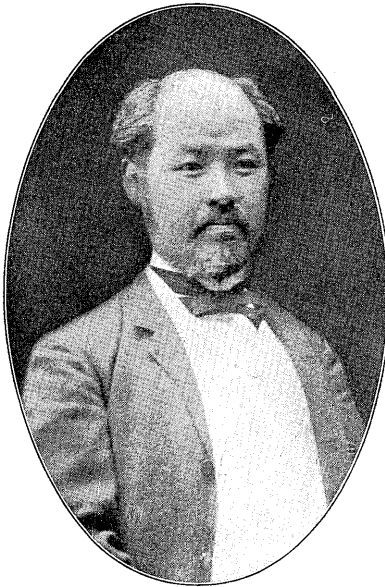
の二案で、これは會議所の會議に提出せられたが、大多數の反對に會ひ否決されてしまった。しかのみならず、森先生を攻撃するの聲はいはゆる志士の間に満ち、その身邊が危くなつて來たので、先生が夜にいつて三條公や岩倉公に會ひに出かけられる時には、鈴木と我輩は馬の兩側について護衛して行つたものだ。

その内に森先生攻撃の聲は同郷の鹿兒島人の間からもわいて來た。由來武をもつて天下に誇つてゐる鹿兒島人でありながら、武士の魂たる帶刀を廢せよとは何たることだとうゝたる非難の聲に政府は大にらうばいして、岩倉、大久保兩公のひ護があつたにも拘らず、遂に先生の職務を免じ位記返上を抑つけたので、先生は意を決して故山に歸られることになつた。

かくて森先生は鹿兒島に歸られたが、我々は依然として大學南校に奉職してをつた。そのうちに、政府は長崎にゐたフルベッキ博士を東京に呼んで、大學南校の教頭に任じ、校内に住はせることになったので、我々も、博士について歴史の會讀をした。さうして我輩は傍バイブルの講義をもしばしば聽いて、自然や、教信者の一人となつた次第である。

明治三年となつて、森先生は徵命に會つて、再び鹿兒島から出て來られ、今度は少弁務使としてアメリカにゆかれることとなつた。その時先生のいはれるには「實は今度お前も連れてゆきたいと思つたが、お前よりも歳上の者で希望者が澤山にあるから、あるひは連れてゆけないかも知れぬ。しかしお前も折角希望してゐることであるから、出来るだけ連れてゆくやうにしよう」とのことであつた。丁度そのころ、我輩が維新前横濱にゐたころの先輩で、江川太郎左衛門の家來矢田部良吉といふ人が、大學南校の教授になつて來た。久し振りで會つて、兄弟同様に親しく交はつてをつた。もとより我輩よりは歳上で、會話こそ上手ではないが、英語を讀むことは我輩よりも優れてゐた。この人がかねてから洋行したいといふ熱心な希望を抱いてをつたから、我輩はある日森先生に向つて「私を連れて行かれる餘地があつたら、代りに矢田部君を連れて行つて下さい」とお願いすると、では一度その人を連れてこいといはるので、矢田部を連れて行つて面會した。矢田部といふ人は我輩が兄としてをつたくらゐで、なか／＼頑固で、自分の意志を貫くことには非常な勇氣を持った人であつた。

森先生への紹介をすましてから、又先生の所へ行つて、先生の考へを聞くと、「どうも、あの人は少しかうかなやうな風がある。しかしお前も頻に自分の代りにといふし、他に見所もあるから、ハッキリは決らぬが、あるひは連れて行くことになるだらう」といはれた。それで歸つて來て矢田部にありのまゝを話すと、矢田部は「さすがに森さんだ、自分もそれには氣づいてゐる。しかし多くの人は自分にその缺點のあることに氣がつかない、一見して見透すとは偉い人だ。それにつけても、その缺點を補はねばならぬ。どうだろう、連れて行つ



君太郎誠堀ノ勤時代在學大

(明治二十二年九月十七日東京ニテ撮影)

てもらへるだらうか」と、森さんの眼識には本當に驚いてをった。この人はたうどう望みかなくて森さんに連れられて米國にゆきコネル大學に入學して、植物學を修め、後年大學教授になつて亡くなつた。その時心配したのは、森さんのところで一しよに書生をしてをった長州の内藤誠太郎が頻に森さんに連れて行つて下さいと願つてゐた。森さんも新たに知り合になつた矢田部を連れて行つて、内藤を連れてゆかぬワケにはゆかぬので、遂に連れてゆかれることゝなつた。この人は、後に堀誠太郎といつて、山口縣の農業學校の先生か何かになり、我輩が日本銀行の馬關の支店長時代に一二度會つたその後この人も死んでしまつた。

【因ニ牧野富太郎曰フ】前文中ニアル内藤誠太郎君ハ一度ビ譯ガアツテ堀ノ姓ヲ名ノツタガ後チ本姓ノ中井ニ復

セラレタ、君ハ今、東京帝國大學理學部植物學教室ニ勤メテ居ラル、教授理學博士中井猛之進君ノ父君デアル、明治ノ初年ニ西洋カラ歸朝セラレ直ニ職ヲ北海道開拓使ノ御用係ニ奉ジテ居ラレタガ後チ東京大學豫備門ニ轉任シタ是レハ多分洋行ノ時分カラ矢田部良吉君ト懇意ナ關係カラデアツタカト思ハレル聞ク所ニヨレバ理學博士白井光太郎君ナドガマダ學生ノ時分ニ同君カラ人生理學ヲ教スハツタトノ事デ今日之レヲ傳聞スルト誠ニ意外ナ珍シイ様ナ感じガスル、後同君ハ東京大學ノ舍監ノ名ヲ受ケシモ主トシテ大學附屬ノ小石川植物園ニ在勤シ時ノ植物學

教授デ園長役デアッタ理學博士矢田部良吉君ノ下ニ園ノ事務ヲ監掌シテ居ラレタ、其當時私ハ同園ノ事務室デ數度御目ニカ、ツタ事ガアツタガ其元氣ノヨイ容貌ト其特色ヲ帶ビタ一種ノ高イ笑聲トハ今尙ホ我が眼底ト耳底トニ其深イ印象ヲ留メテ居ル、其後同君ハ明治二十五年矢田部教授ガ非職トナツテ大學ヲ退カレシ際冠ヲ掛ケテ長州ノ郷里ニ歸リ山口縣立農學校ニ教鞭ヲ執リ且教頭ヲ勤テ居ラレタガ其後同校ヲ辭シ明治三十五年十月八日ニ享年五十九歳デ易簣シ今ハ早ヤ疾クニ故人トナラレタ、此様ニ同君ハ我が東京ノ大學然カモ植物園ニ長ク勤メテ居ラレタガ今日其令息ナル猛之進君ガ出世シ同ジ大學ニ植物學ノ教授ニナツテ居ラル、ノハ誠ニ奇シキ因縁デアルト謂ハネバナラナイ、是レハ疑モナク父君ノ靈ガ冥々裡ニ我がいと子ヲ思ヒ出ノ多イ此大學ヘ導イタモノデ定メシ父君モ九泉ノ下デ喜ンデ居ラレルコトデアラウ

○杜仲軒赭鞭夜話 (十)

久内清孝

●やぶかんざうノ化物

昭和三年十二月某日相州葉山長者ケ崎ノ叢中デ寫真ノ様ナはまぐわんざう(牧野富

太郎氏ノ新稱デ同氏ハ *Hemerocallis littorea Makino* (sp. nov.) ノ名デ發表スル豫定デアルト云フ) ト思ハルルモノヲ採集シタノデアツタガ此ノ者ハ葉ガ花莖ニ現レタモノデ先ヅ先端ニ一個花ガ咲イタ後他ノ花トナルベキ蕾ガ芽ヲ出シタモノト考ヘラレル、大シテ珍ラシイトハ思ハナイガ一奇現象トシテ報ジテオク

●がぶた

第二圖ハ一昨年秋友人徳永家次君ガ常陸ノ北浦デ採集シタ葉柄カラ發芽シテ居ルがぶたデア

ル、此者葉柄ノ二寸位下ノ處カラ發芽シテ他ノ部分ハ腐レテ失セ新生シタ芽ガ生育長成スル好個ノ例ト見ルコトガ出來ルト思フ、第三圖ハ其芽ノ處丈ヲヤ、廓大シタ寫真デアル、がぶたハ此現象ガアルノガ普通ノ特徴デ其處カラ根ト芽ト花トヲ出スノデ芽ガ一番最後ニ出ヅル、花ハドウ云フ譯カ普通ニハ實ガ熟サナイ